

宗教と平和

～自他共に心豊かに生きることのできる社会の実現にむけて～

開催日 2015 (平成27) 年 2 月10日

◆「戦争と宗教」——西谷修先生インタビューから——

『宗報』(六、七、一一・一二月合併号)において、伊勢崎賢治先生(東京外国語大学教授)への取材について報告してきました。今回は、伊勢崎先生に引き続き、西谷修先生(立教大学特任教授)への取材報告です。『テロとの戦争』とは何か——九・一一以後の世界』(以文社、二〇

〇二年)を出版されるなど、「戦争」についてこれまで哲学的に考え、積極的に発言してこられた西谷先生より、「テロの現実と宗教の役割」をテーマにお話しいただきました。尚、取材は二〇一五年一月に行われました。

Q——中東は、いまどのような状況なのでしょうか？

西谷 「イラク戦争」以降ですが、一番の問題は、あそこに人びとが生活できるような社会秩序がなくなってしまったことでしょうね。

シリアがあり、イラクがあり、十数年前くらいまでは国の形があり、統治の秩序がありました。もちろん、それぞれの

国の事情によって、満足する人びとと、不満な人びとがいたと思います。もともと、あの地域はイギリスとフランスが地図の上で勝手に線を引いて国をつくったところで、住民たちが自らまとまって国ができたわけではありません。だから内部に対立があり、統合は難しいのですが、それでも何十年かの時間を経て、曲がりなりにも社会生活の成り立つ統治の秩序はできていました。もちろんよく言われ

たフセイン体制の問題などはあったわけですが。

そうした中で、二〇〇三年からアメリカとイギリスを中心にした西側の国によってイラクが攻撃され、占領されつくり変えられました。それを、一般には「イラク戦争」と言いますが、イラクの人たちは「イラク戦争」とは呼びません。というのも、自分たちが戦争を始めたわけではないのですから。

この戦争は、中東地域の問題を解消するためにアメリカが軍隊を送り込んで爆撃し、フセイン政権を倒して統治機構を崩壊させ、自分たちの望むような、自分たちが受け入れられるような体制をつくらうとしたわけです。しかし思うようには運ばなかった。

その結果、十年たっても、イラクは混乱をきわめ、統治が機能せず、どんな秩序も成り立たなくなった。それでいわゆる「テロリスト」が跋扈するようになったわけですね。

Q——集団的自衛権の問題など、日本に変化が見られますが、中東と日本との関係に影響はありますか？

西谷 日本は世界から、無思慮なアメリカの追従国という扱いをされるでしょうね。よく言われるように、しばらく前までは中東諸国では日本の評判は大変よかったです。というのは、中東諸国でまず警戒されるのはアメリカです。アメリカはこの地域をコントロールしようとする西洋世界の代表です。そういう状況の中で、中東の人びとにとって日本はアメリカと戦ったアジアの国として認識され、親近感をもたれていました。原爆にもたいへん同情的でした。

それとやはり、明治以降、日本は勤勉で発展して、西洋世界と渡り合ったということも大きいでしょう。アジアの手下になる国だというような認識が中東の人びとにはあったのです。

西谷修先生（立教大学特任教授・東京外国語大学名誉教授）

一九五〇年生まれ。東京大学法学部卒業。東京都立大学大学院、パリ第八大学で学ぶ。その後、明治学院大学教授、東京外国語大学大学院教授を経て、二〇一四年四月より現職。

〈主要著書〉

『戦争論』（岩波書店、一九九二年／講談社学術文庫、一九九八年）

『夜の鼓動にふれる——戦争論講義』（東京大学出版会、一九九五年／ちくま文庫、二〇一五年）

『テロとの戦争』とは何か——九・一一以後の世界』（以文社、二〇〇二年／「テロル」との戦争」増補新版二〇〇六年）

Q——先生はテロの問題を専門とされています。テロと戦争の違いについて、どのように理解すべきでしょうか？

西谷 さかのほれば切りがないですが、二〇〇〇年以降、アメリカが「テロとの戦争」を打ち出しましたね。それは、古典的な戦争ではありません。「新しい戦争」と言われます。何が新しいかというと、相手は国家ではない。近代的には、戦争というのは国と国とのもの、国家間戦争です。だから対等の相手同士の衝突

ですけれど、九・一一を引き起こしたのは国ではありません。ある種の武装集団を犯罪者として軍事的に破壊する。それをアメリカは「テロとの戦争」と呼んだわけです。

それまでの戦争だと、国際法的な行為だから、暴力の行使ではあるけれど法的な枠組みがありました。しかし「テロとの戦争」の場合には、相手は単なる抹消すべき敵で、何をやってもよいことになります。戦争の限定がなくなってしまったのですね。

Q——中東において日本への信頼を失わないために、何が必要でしょうか？

西谷 中東世界で外交的に何か役割を果たそうと思ったら、イスラエルと仲がいないなんて態度は絶対にできません。イスラエルは中東にとっては、西洋が仕掛けた抜きがたい棘ですから。たとえ背後にさまざまな関係があっても、少なくとも公平な態度を保ち、そのうえでイスラエルとも友好的な関係を結ばなければならぬでしょう。アラブ諸国の信頼を得て関係を維持するためにはそれぐらいの慎重さがないとまずいでしょう。

ところが、一月に安倍首相はイスラエルを訪問した際、ダビデの星と日の丸の両国旗前で、得意げな様子でネタニヤフ首相と親しそうに会談しました。これはイスラエルの完全な演出勝ちだと思います。要するに、日本は完全にイスラエル側だということを世界に示したことになるのです。ということは、イスラム世界全体に対して敵対するということで

Q——歴史的に、宗教と戦争は不幸な繋がり方をしてきました。そうならないために、宗教はどのようにあるべきでしょうか？

西谷 近代の国民国家とは、国民を動員して戦争をする国家です。だからどうするかというと、結局それまでは教会が握っていた「死の面倒」を国家が教会に代わって見るのです。「死の面倒」を見るというのは、人びとの死に意味を与えるとか、死に対する不安を取り除くとか、そういうのを引き受ける役割です。それを以前は教会が、つまり宗教が担っていました。ところが、世俗国家は世俗の教会として、「死の面倒」の占有機関になったのです。具体的にはどうということかというところ、「国のために死になさい、そうすれば面倒を見てやる」、それが国民国家です。国のために死なせる代わりに

国が人びとの面倒を見る。その戦争の局面が薄れると福祉国家になるのです。

日本でも明治以降、国家神道がそのスタイルをつくりました。日本も国民国家化するわけです。お国のために死ぬという体制をつくる。日本の場合には天皇のために死ぬということになる。それが他国と異なる日本の特殊性です。

あらゆる宗教は、本当は天皇などより自分たちが大切にしている神仏を優先するでしょう。しかし、「天皇のために死ぬ」体制の中で、「仏と天皇とどっちが偉いんだ」と問われた場合、「いや、仏さまの方が……」などと言えば、「国賊」です。だから、みんな天皇の方が偉いと言って、戦争に協力せざるをえませんでした。

宗教教団は人びとの心の問題を預かっています。教団が、「(戦争へ) 行きなさい、それが仏の道です」と言えば、みんなが戦争に行かざるをえないというので、加担の罪は重いということになります。日本の天皇制国家はこのような形です。

宗教を動員しました。

神道は宗教ではない、宗教は一人ひとりの内面の問題だけれども、日本では「公」は、古来の習俗でやるんだ、これが国家神道の論理です。このようにして、神道が公共性の全てを覆うという形で国家体制が設定された。その中に全ての宗教教団が包摂^{ほくせつ}されてしまったわけです。

Q——最後に、宗教にできることは何でしょうか？

西谷 例えば、ヨーロッパで今起こっている問題の一つに移民二世のことがあります。最初の移民は、もともと自分たちが差別されることや、底辺の仕事させられることに関して、覚悟をもって来ています。それは折込済みで来るわけです。けれども第二世代は、フランス共和制の場合ですと、そこで生まれたらそのままフランス国籍になるから、彼らはフランス人として育ちます。ところが、全然フランス人として扱われない。

これは非常に重要なことだと思えます。けれども、簡単なことではありません。んから、この状況は残念ながらしばらく続くでしょう。

(本願寺派総合研究所・教団総合研究室)

ISIS^{*}に参加する若者たちは、イスラム社会をベースに生まれてきている。し、イスラムの教義を基に行動している。けれども、無差別殺傷をするようなことは、イスラムを高めることには決してならず、むしろイスラムを破壊するものだという事、それは人のたどるべき道ではないといったことをはっきり示す必要がある。

キリスト教でも宗教戦争で凄惨な殺し合いを行ったわけですから、どんな宗教でもそういう側面はある。けれども、イスラムは今の世界で、自分たちがイスラムであることの価値を肯定するならば、その暴力的な噴出を認めてはならないでしょう。矛盾の解決は他の方法で求めなければならぬ。それがイスラム指導者たちの役目だということを、多くの宗教者も訴えています。

先日、フランスで凄惨^{せいさん}な事件が起きました。その犯人は、親を早くに失い孤児院で育っている。それでも周囲にはよい印象を残していたようですが、社会からの疎外感を感じながら生きていた。そして、その軋轢^{あつれき}がテロとなって爆発したわけです。結局、彼らが社会の中で生きていけるような場がなかった。彼らがまともに生きられるような保障も何もなかったのです。

私は誰もが宗教をもてばいいなどとは思っていませんが、宗教が何をやるかと言えば、社会から疎外され、居場所のない人たちに居場所をつくることか、こころの構えを与えるということではできると思います。

Q——ISISの問題について宗教的関与は可能でしょうか？

私のチュニジア人の友人なども指摘しています。とにかく今全世界のイスラムの指導者たちは、イスラムは暴力では

*1 シャルリー・エブド襲撃事件。二〇一五年一月七日、風刺週刊誌を発行している会社に、覆面をした複数の武装した犯人が襲撃し、警官一人や編集長など合わせて十二人が殺害された。報道と表現の自由をめぐる議論が起こった。

*2 イラクとシリアで発生したイスラム過激派組織で、ISや、ISIL、ダークイシユ、「イスラム国」と呼ばれることもある。なおISISは、Islamic State of Iraq and Syria (イラクとシリアのイスラム国)の略称を由来としている。イラクとシリアの国境地域を中心として、武力支配し、「カリフ国家」の建設を主張している。

※次回より、吉田正紀先生(元慶應義塾大学特別招聘教授・元海上自衛隊海将)の発題内容について報告します。